

Title	臨床哲学の余白 [Vol.9]
Author(s)	
Citation	臨床哲学のメチエ. 2001, 9, p. 39-39
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/3758
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

『メチエ』ももう9号になりました。

このところ対話関係の特集が続きますが、そのおかげで哲学プラクティスやソクラティック・ダイアログについてはようやく立体的に見ることができるようになったと思います。2002年夏にはイギリス・オックスフォードで開催されるソクラティック・ダイアログの国際会議にて、臨床哲学関係者から中岡・寺田・堀江・本間の4名が日本でのダイアログの取り組みについて発表を行うことになりました。

本文でも触れましたが、「コーチング」はとても面白いものです。現在「対話技法論」という授業を設け、ソクラティック・ダイアログや哲学カフェの進行役の訓練を行っています。今後「コーチング」を本格的に導

トワークがとても重要だと感じます。(会沢) ドイツとオーストリアから二人の「ソクラテス者」を招いて、講演やシンポジウム、SD、DTを開催した。こんな機会はめったにない。この経験で、これまでヨーロッパ(英語・ドイツ語)と日本(日本語)で別々に参加したり進行役を行ってきたSDのイメージや理論的な意味が、少し立体的に見えてきたように感じた。参加した人たちも、なんとなく「本場」の感覚を味わったのではないだろうか。

対話の面白さ(また、つまらなさ、難しさ)の本領は、まずはそこに居合わせてみなければ分からない。オックスフォードで初めてSDに参加したとき、三日間、慣れない英語で必死に考えをまとめ、聴き、発言するこ

臨床哲学の余白

入ることによって、対話の技法をより洗練できると確信しています。また、それと平行して芸術作品や映画を使ったダイアログなども実験的に行う計画をしています。こうした取り組みを続けることによって数年後にはこの研究室から立派な進行役たちがはばたち、各地で活躍することを期待しています。

(本間)

国際会議やSD週間に参加して、英語が十分話せないしんどさも味わいましたが、日本や日本で哲学をすることを意識するよい機会になりました。

そのうち哲学プラクティス国際会議を日本で開催することになるのでは。そのためには、もちろん英語は必要ですが、国内のネッ

とに集中した。そこで、まるで自分がヴィトゲンシュタインにでもなったかのように「考えた」という充実感を味わうことができた(この時のテーマが「理解と誤解」であったことにもよる)。この効果を、しかしどのようにして創り出すことができるのか。またSDを行うことで、どのような別の効果が生まれているのか。これもまた、自分でSDを続けながら探っていくしかない。対話は終わらない。(堀江)

大学の外にはたしかに哲学研究者はいません。しかし、長い「人生」をおのおの懸命に生き抜いてきた人々の言葉には、時として名高い哲学者の書き物にも匹敵するぐらいの迫力を感じるときがあります。(三浦)